産経書房

新仕事の周辺

最後まで消えない余白

河合　香織（ノンフィクション作家）

取材依頼の手紙を便箋に書いてから2カ月もの間、手元に置いている。担当編集者にはあきれられ、「手紙を投函するだけのことがなぜできないのか」と問い詰められた。そう言いたくなる気持ちもよくわかる。けれども、私にとってこの逡巡する空白の時間は、ノンフィクションを書くためになくてはならないのだ。

私は人に話を聞かせてもらい、それを文字にすることを生業にしている。子供を殺された親に話を聞き、子供を殺そうとした母のところにも行く。事件でなくても、その人の心の柔らかい部分、そっとしておいてほしいという部分に耳を傾けることも少なくない。

この仕事を始めたばかりの頃、「取材を受けるということは、自分という存在が奪われるような経験で、だからこそ余白を残して全部を聞こうと思ってはいけない」と先輩から教えてもらったことがある。一期一会かもしれないから、その場ですべて聞き尽くさないといけないと思っていた当時の私には、意外に思えた。

けれども、経験を積むにつれ、取材とは魂を分け与え、受け取る濃密な時間だからこそ、余白が大切になるということを知った。だからこそ、私はゆっくりと取材を始め、ゆっくりと聞くように努めている。できるだけ一度に核心まで聞こうとせず、白い部分を残しておく。

先頃、大宅壮一ノンフィクション賞をいただいた『選べなかった命』では、出生前診断の誤診によりダウン症児が生まれたと医師を訴えた母親に初めて会ってから、取材に5年の歳月がかかった。

北海道・函館へ幾度も通い、裁判を傍聴し、結審後もコーヒー1杯で8時間にわたって話を聞くことをしつこいほど繰り返した。亡くなった子の墓参りにも行った。それでようやく相手のことを理解できたかと思うと、最後の最後に「実は今まで言っていませんでしたが…」という話が出てくる。これこそノンフィクションの限界であり、醍醐味ではないか。

つまり、人を本当に正確に描き切ることなんてできないということだ。どれだけ長い時間を共有しようとも、わからない部分は残る。いや、知れば知るほどに、わからなくなっていくことも多い。

余白は消そうとしたって、最後まで消えることはない。私はそれでいいと思っている。本当のことなんて誰もわからないからだ。書いた人も、そして書かれた本人であっても。わかったつもりにならず、わからなさを胸に抱きしめながら、それでも何かに近づこうと格闘する過程こそがノンフィクションの面白さだと思っている。

その人の物語は続いてゆくが、作品の始まりと終わりは作家に委ねられている。手紙が届いたらびっくりするだろうし、なぜ自分なのかとも思うだろう。それでもなお、どうしてもあなたの物語を、あなたのことを聞かせてほしいという思いが伝わることを願いながら、郵便局に向かった。

かわい・かおり　昭和49年生まれ。神戸市外国語大学卒。平成16年、『セックスボランティア』でデビュー。21年、『ウスケボーイズ　日本ワインの革命児たち』で第16回小学館ノンフィクション大賞受賞。今年5月、『選べなかった命　出生前診断の誤診で生まれた子』で第50回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。ほかに『絶望に効くブックカフェ』など。

児童書

地球から宇宙をめざせ！

アレクサンドラ・ミジェリンスカ＆ダニエル・ミジェリンスキ文・絵、武井摩利訳、山崎直子日本語版監修（徳間書店・2400円＋税）

オニのサラリーマン　じごくの盆やすみ

富安陽子文、大島妙子絵（福音館書店・1400円＋税）

会計と犯罪　郵便不正から日産ゴーン事件まで

細野祐二著（岩波書店・1800円＋税）

元著名会計士、執念の一冊

執念が書かせた一冊だ。

著者は元大手監査法人所属の著名公認会計士で、平成16年にシロアリ駆除会社の粉飾決算に加担したとして逮捕され、執行猶予付き有罪判決を受けた。

裁判では、会社の旧経営陣や株価操作を手掛けた仕手筋の人間が、検察側証人として著者に不利な証言をしたという。事件での無念の思いから、著者は会計上の犯罪を研究する「犯罪会計学」の専門家となり、多くの企業の粉飾決算を指摘し、会社の再建にも携わってきた。

評者は知人から、22年に郵便不正事件で厚生労働省局長の村木厚子氏が無罪になったとき、著者が「本当に羨ましい」と吐露し、事件の徹底的研究を始めたと聞いた。村木氏の裁判では、弁護人の弘中惇一郎弁護士が大阪地裁裁判長の良い評判を聞き、事件の東京地裁への移管を見送ったことや、村木氏が獄中で資料を読み込み、フロッピーディスクの文書の最終作成日時から検察の主張の矛盾を発見したことなどが有利に働いた。

しかし、最大の勝因は、起訴事実を全面的に否認して争ったことだと著者は指摘する。一方、著者の場合は、弁護士の力量不足などもあり、問題となった会社の会計処理が粉飾であるという検察の解釈が書かれた捜査報告書が添付された書類の証拠採用にうっかり同意してしまった。そのため、当該会計処理は粉飾ではないという肝心の主張ができなくなった。

著者は日本債券信用銀行や日産自動車のカルロス・ゴーン前会長の会計事件も分析し、起訴事実を争う重要性を改めて指摘する。評者も取材の過程などでよく感じるが、本書で描かれる証人の弱みを逆手に取って、筋書き通りの証言をさせる検察の捜査手法や、法廷証言より検察官調書を重視する日本独特の「検面調書の特信性」は、日本の裁判の大きな問題点である。

本書では、迫真の人間ドラマも描かれる。大阪地検の特捜検事が「検事を辞めなければならなくなりました」と上司にフロッピーディスクのデータ改竄を告白する場面や、拘置所に収監された著者が初老の看守に「辛い時はここで泣け。外で待っている人はもっと辛いんだ」と言われ、血の涙を流す場面には、胸が締め付けられる。

評・黒木亮（作家）

アインシュタインの旅行日記　日本・パレスチナ・スペイン

アルバート・アインシュタイン著、ゼエブ・ローゼンクランツ編、畔上司訳（草思社・2200円＋税）

今も有効な日本人論

本書を読みながら思い浮かべたのは、1920年代に駐日フランス大使を務めた詩人ポール・クローデルの《私が決して滅ぼされることのないようにと希う一つの民族がある。それは日本民族だ》との文言だった。

同じ頃、約6週間日本に滞在した著者も京都御所を訪れ、《純粋な心は、他のどこの人々にも見られない。みんながこの国を愛して尊敬すべきだ》と日記で日本にエールを送った。

最初は違った。船中日記には《国家イコール宗教という不気味な連中》《日本人の心理を理解するのは困難》など懐疑や皮肉が見られる。何が著者を変えたのか。カギは著者の会った当時の日本人にあるのだろう。

著者は滞在中、息子への1922年12月17日付の手紙で《日本人のことをお父さんは、今まで知り合ったどの民族よりも気に入っています。物静かで、謙虚で、知的で、芸術的センスがあって、思いやりがあって、外見にとらわれず、責任感があるのです》と最大級の称賛を惜しまない。

過去、日本に魅了された外国人が数々の貴重な日本（人）論を生んできた。本書も間違いなくその一冊に入る。日本以外にもパレスチナ、スペインなどの旅日記、旅先からの書簡やはがき、講演スピーチ、編者のアインシュタイン論など内容は多岐にわたるが、日本（人）への飽くなき好奇心や観察眼、温かい日本理解が何と言っても印象に残る。外国人ならではの視点や示唆も少なくない。

《日本人は欧米文明を受け入れるのが好きです。しかし自国の心のほうが、外見は輝いて見えるそうした文明より価値があることを知るべきなのです》との指摘は重く、今も有効だ。

と同時に100年前の日本人の美質―《日本人は簡素で上品》《農家やその他の質素な日本家屋を見たが、すべてぴかぴか…。躾がよくて愉快な大勢の子供たち》―は果たしていまだ健在だろうか。そう思うと、いささか心もとないものがある。

本書は著者の人間性が垣間見えるのも楽しい。洋上でノーベル物理学賞受賞を知ると、息子たちに（賞金で）家を探しなさいとか、残金はお前たちの名義で投資するよと手紙に書く。天才も人の子よ、である。

評・千野境子（客員論説委員）

いくつになっても　トシヨリ生活の愉しみ

中野翠著

人気コラムニストが老いについて、さまざまな角度からつづっている。例えばファッション、「髪」パズルは難度が高く、頭脳を刺激してくれるという話、地球儀や日本史の教科書を買い求めたり、部ちに向けても赤をすすめる。

自分史について、若いころは冷笑的にとらえていたが、曾祖母の